

「私は父となる」

Ⅰ歴代誌17：1～15、Ⅱコリント6：18

子供の頃、「父の魂」という漫画に夢中になりました。バット職人の父親が子供に託した志の話です。スポール漫画というよりも親子関係のテーマなので人気がなく、友達も誰もその漫画を知りません。しかし、その中のしびれる台詞に「野球をやりたければやれ。しかし、今日の父の姿を覚えておけ。」とあって、最後のバットを作り、そこに「父の魂」と刻んで病死した父親のことばがありました。

主人公はその後高校野球で全国優勝するのですが、最後に父の遺志をついでバット職人になるという物語です。父親として自分が最も大事にしているものを息子に示したのだな、という事が強く感じられます。

十字架には主イエスの我々に対する愛が明確に示されています。が同時に父なる神が十字架を通して「私があなたがたの父となる」という意志を示されたのだと思います。

私たちはその主の意志を継ぐものとして召されました。確かにいろいろな賜物があり、ここに対する主の計画も違うでしょう。しかし、すべてのクリスチャンは救われたその時に主に召されたのです。どんな召しに召されたのでしょうか。「私たちが父となる」という召しです。

老若男女、すべてのクリスチャンは「父となる」という共通の召しを受けています。その召しにはすばらしい反面、苦しく、こわい事も多々あります。父となるということは子の人生に影響を与えることと等しいからです。

ローマカトリックのように法王から始まる、司祭、神父、その他もろもろの肩書きは必要ありません。すべてのクリスチャンは父です。であれば、どうしたらその役割を全うできるのでしょうか。

方法は一つ「父の姿を覚えておけ」しかありません。十字架の主イエスの背後にある、天の父からのメッセージ「わたしはあなた方の父となる」をそのまま受け取ることです。そして折りに触れて、それを思い出す事です。それが信仰です。その信仰が私たちの生き方の芯となり、その芯が影響力となって人々に流れるのです。

十字架は私たちの救いのため、と同時に私たちの召しの根幹でもあるのです。子の十字架を通して、父なる神のところに触れられる恵みを感謝します。